

『ウィンザーの陽気な女房たち』の狂言化

—新作狂言『二人女房』と『法螺侍』の比較研究より

菊地 善太

日本大学大学院総合社会情報研究科

Two New Kyogen Adaptations of *The Merry Wives of Windsor*

—A Comparison of *Ninin-Nyobo* and *Horazamurai*

KIKUCHI Zenta

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper considers the kyogenization of *The Merry Wives of Windsor* by Shakespeare. Two new kyogen adaptations, *Ninin-Nyobo* and *Horazamurai*, are compared and their features are discussed, with focuses on plot, performing time, conformity with kyogen style, lines quoted from other works, grand finale, and so on.

1.はじめに

高橋康也は論文「フォールスタッフ変容～シェイクスピアを狂言化する¹」の冒頭で、「シェイクスピアは狂言化に堪えるか、狂言はシェイクスピア化に堪えるか」と問題提起した。

高橋は同論文で、前者のやり方として「シェイクスピア喜劇から狂言になりそうな物語部分を取り出して伝統的一幕物の狂言として様式化するというやりかた²」を示し、『じゃじゃ馬馴らし』や『夏の夜の夢』や『十二夜』³、あるいは『リア王』の絶壁の場を題材とした翻案作品⁴を例に挙げた。

しかし「相手の生身を強引にこちらの寸法に合わ

せて断ち切る「プロクルステスのベッド⁵」にも似た方法は、あまり感心しません⁶」と否定し、後者の試みとして自身の『法螺侍』（『ウィンザーの陽気な女房たち』の翻案、1991年創作・初演）の創作を論じている。

『じゃじゃ馬馴らし』などの翻案新作狂言が原作を強引に狂言の型に嵌めているという論理の展開は、私にはよく理解できなかった。強引にならないように筋を絞り込み舞台や登場人物など設定も変えて翻案しているのではなかろうか。

本稿は、前者、シェイクスピアを狂言化したものの一例であり、『法螺侍』と同じく『ウィンザーの陽気な女房たち』を原作とする新作狂言『二人女房』（片山九郎右衛門（後の片山博通）作、1976年に創作・初演）に着目し、『法螺侍』と『二人女房』の二作品の翻案化の異同を比較することで、上記の強引か否かの問題、ひいては冒頭の「～に堪えるか」の問題を考えようとするものである。

なお、『ウィンザーの陽気な女房たち』を原作とする作品では、他にも関根勝・作の『狂言&オペラ フ

¹ 高橋康也「フォールスタッフ変容～シェイクスピアを狂言化する」、高田康成ほか『シェイクスピアへの架け橋』東京大学出版会、1998年、pp.185-196.

² 同「フォールスタッフ変容」、p.185.

³ 『じゃじゃ馬馴らし』は九世三宅藤九郎（後の七世三宅庄市）・作。息子の和泉保之（後の元秀）により1976年に初演され1991年に改作・上演された。改作当初はパンフレット等で『じゃじゃ馬馴らし』と『じゃじゃ馬馴らし』の表記が混在したが、現在はほぼ『じゃじゃ馬ならし』と表記されている。その他二作は和泉元秀・作で、1991年に和泉元秀により初演された。

⁴ ダン・ケニーが1991年に創作・初演した。

⁵ 「プロクルステスの寝台」は事物の勝手な解釈や杓子定規をいう比喻として用いられる（『大辞林』（三省堂、第三版）より）。

⁶ 前出「フォールスタッフ変容」p.186.

オールスタッフ『法螺吹右衛門』（2010年初演、狂言師とオペラ歌手が共演）があるが、これは台本テキストが入手できていないので比較対象から外した。

2.原作と『二人女房』と『法螺侍』の粗筋

舞台芝居は二時間前後の上演のものがざらであるが、一般に狂言の一つの作品の上演時間は十分～四十分くらいである。狂言では単純な筋が好まれることもあり、通常、狂言化された翻案は原作から筋が絞込まれ、また場面が削除されて、原作より短い台本、上演時間になる。

さて、原作と『二人女房』と『法螺侍』を読み直してみると、二つの翻案が原作から筋を絞り一部を削っていること、それぞれの翻案で、好色な主人公が二人の婦人に恋文を送り懲らしめられる筋が取り上げられ、原作にある若者の恋の筋が削除されていることが確認された。以下、それぞれの粗筋を示す。

2.1 原作粗筋⁷

アン・ペイジとの結婚を望むエイブラハム・スレンダーとフランス人医師キーズは決闘騒ぎを起こすが、ガーター亭の主人により決闘を回避する。

放埒な騎士フォールスタッフは、フォード夫人とペイジ夫人を騙して金を得ようと二人に恋文を送るが、二通の恋文は宛名以外一字一句同じであった。それを知った二人の夫人は馬鹿にされたと怒り、フォールスタッフを懲らしめる悪だくみの相談をする。

一方、妻の浮気を心配するフォード氏は、ブルックと名乗ってフォールスタッフに近づくと、フォールスタッフを煽って妻との浮気を探る。

フォード夫人宅を訪ねたフォールスタッフのところにペイジ夫人も訪れる。夫人からフォード氏がもうすぐ帰宅すると聞き、フォールスタッフは氏から隠れるよう汚れものと一緒に洗濯籠に入れられ、運ばれてテムズ河に投げ込まれる。

再びフォード夫人に呼び出され、懲りずに出かけたフォールスタッフだが、またもペイジ夫人が来たところでフォード氏が突然帰宅。氏が毛嫌いしてい

る老婆に扮装させられ、フォード氏に罵られ打ちのめされて追い出される。その後夫たちは妻たちから真相を聞いて安堵すると、彼らはさらに懲らしめる企みをめぐらす。

三たび呼び出され言われるまま角を生やす扮装をして森を訪れたフォールスタッフは、今度は妖精に扮した村人や子供たちから、火の着いた松明で小突かれ、抓られる。子供たちが去った後、フォード、ペイジ両夫妻の会話から騙されたと気がつくが反論する元気もなく自嘲する。

こうした最中に、ペイジの娘アンは両親に結婚を反対されていた紳士フェントンと結ばれ、最後に両親の祝福を受ける。自分を騙したペイジ夫妻が彼らの推すスレンダーやキーズと結ばれず、娘にしてやられたことで、フォールスタッフは溜飲を下げる。

2.2 『二人女房』粗筋⁸

四万台（よまんたい）五郎というエライ役人が浮気をし、山一つ越えたところに住む「いちや」という女に懸想の文を届けるが、いちやは使いに來た太郎冠者に賄賂を渡して味方に引き込み、断ろうとする。太郎冠者はいちやを四万台の妻「おごう」に会わせて談合するように勧める。

おごうの参詣に合流したいちやと太郎冠者は、おごうに文を見せる。おごうはわわしく怒り狂うが、太郎冠者がいちやの夫を装い、おごうは毘沙門天の化身となって四万台をこらしめようとの謀りごとを提案し、三人はそれを実行することになる。

毘沙門堂にやってきた四万台は早速いちやを口説こうとするが、隠れて見ている妻が怒って足踏みし、こっそり鉾で打ちすえる。

そこにいちやの夫に扮した太郎冠者が現れ「ドンドン」と戸を叩くと、四万台は衣を被って隅に隠れるが、入ってきた太郎冠者に棒で何度も打たれる。いちやも四万台が逃げる邪魔をする。

しかし夫が打たれるのを見て頭に來たおごうは太郎冠者を突き放し夫の頭巾を取ると、太郎冠者といちやを追いだしてしまう。

安心したのも束の間、おごうの自分への怒りが解

⁷ 原作、邦訳は『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』新潮社、2003年を参照した。原作はアーデン版、本作の邦訳は小田島雄志、大山敏子、坪内逍遙による。

⁸ 片山九郎右衛門『二人女房』、『観世』観世会、昭和28年（1953）6月号より。

けていないことに気づいた四万台は「許してくれ」と逃げ惑う。

2.3『法螺侍』粗筋⁹

法螺吹き侍の洞田助右衛門は、かつては將軍家の跡取り若殿とも親しかったが、素行不良のため都を追いだされ、田舎で飲んだくれて宿賃も払えぬ貧乏ぶりだった。

女好きの洞田助右衛門は一計を案じ、商人の焼兵衛と平兵衛の女房のお松とお竹に懸想して貢がせようと考え、二通の恋文を書くと、嫌がる従者の太郎冠者と次郎冠者を急かたてて女房たちに届けさせる。従者たちは相手に告げ口して事を暴露し、主人を懲らしめようとする。

橋掛かりで出会ったお松とお竹は交互に文を読み交わし、寸分たがわぬ付け文に呆れ怒り、灸をすえようと相談する。

太郎冠者から事の次第を聞いた焼兵衛も腹を立て、餅兵衛と名を変えて洞田助右衛門に近づくと、洞田を煽って女房との浮気を探ろうとする。

お松に呼び出された洞田助右衛門は早速お松を口説くが、そこにお竹がやってきて、どこかで話を聞いた焼兵衛がものすごい形相でこちらに来ると伝える。

実際に焼兵衛がやって来て、洞田助右衛門がいよいよ隠れなければならなくなると、女房たちは予め太郎冠者と次郎冠者が用意していた大きな洗濯かごに誘導し放り込むと、汚い布をいっぱいかぶせる。

太郎冠者と次郎冠者は籠を運ぶと洞田助右衛門を川に投げ込んだ。女房たちに誤解の解けた焼兵衛も加わり、さらなる懲罰の悪どくみが企てられる。

再びお松から文が届き、天狗の面を付けて鎮守の森の仮装行列の祭りに来るよう誘われた洞田助右衛門は、懲りずに森にやってくる。

暗がりでは悪鬼に扮した一同がざわつく中、森の悪鬼が出たと叫ぶお松の隣りで、洞田助右衛門は死んだふりをしてやりすごそうとする。しかし一同はつねり、踏んづけ、ひねり、蹴つとばし、くすぐるなどし、助右衛門が溜まらず許しを請うと、「謝るか」

「謝る」、「悔ゆるか」「悔ゆる」、「真人間になるか」「なる」と反省させ、一同は仮面をはずす。種を明かし再度謝るよう請うが、助右衛門は「笑ふが人生、笑はるも人生」と開き直ると、皆も付ける薬がないとそれを許し、皆で踊って退場する。

2.4 筋の簡素化とタイトル

上記三つの台本を再読して、『二人女房』と『法螺侍』では、原作のアン・ペイジとフェントンの若者たちの恋の駆け引きの筋が割愛されていることがわかった。二作品とも、宿屋の主人も町の人たちも殆ど登場せず、女好きの法螺吹き男が女房たちにより懲らしめられる筋だけが取り上げられている。

ここで『二人女房』では、洗濯かごの場面も森で妖精（悪鬼）に抓られる場面も出てこない。一方で『法螺侍』は出来事の細目も原作に似たものに翻案されており、『法螺侍』のほうがより原作を感じさせる翻案になっていた。

主役とタイトルについても考えさせられた。原作の『ウィンザーの陽気な女房たち』では謀りごとをする妻たちが生き生きと描かれ、老いぼれ騎士を笑い飛ばす喜劇となっており、フォールスタッフも面白いけれども、やはりタイトル通り『女房たち』が主役と思えた。

『二人女房』では、わわしい妻のおごうが一番印象に残る。四万台も同情を買うが妻の存在感には及ばない。策士の太郎冠者も面白い脇役であるが、これもタイトル通り「女房」が主役である。戦後の時代の変わり目に、おごうのような女性の台頭がよく見られたのであろうか。

『法螺侍』は、一転して洞田助右衛門が終始目立つ。これも女たちが謀りごとをめぐらす話だが、洞田の台詞が圧倒的に多く、存在感も圧倒している。この作品の主役は「洞田助右衛門」であろう。

ちなみに『二人女房』で四万台五郎の台詞は 107 行で全体の 3 割弱、この洞田助右衛門は 151 行と全体の 3 割 5 分で『二人女房』よりも割合が多い。

高橋は『法螺侍』の創作にヴェルディのオペラ『ファルスタッフ』を参考にしたと言っており¹⁰、タイ

⁹ 高橋康也『法螺侍』、『まちがいの狂言』白水社、2003 年より。

¹⁰ 「後口上にかえて」、前出『まちがいの狂言』pp.140-141 に、「法螺侍」では、ヴェルディの最晩年

トルを『…女たち』にしなかったのは、このオペラの重みを尊重したのかもしれない。

3.登場人物、幕場数、上演時間の推定

ここでは、登場人物の数、幕場の数、それから上演時間について、原作、『二人女房』、それと『法螺侍』の異同を確認する。

3.1 登場人物

≪原作登場人物¹¹≫21名、他召使い

サー・ジョン・フォルスタッフ

フェントン …若い紳士

シャロウ …地方の治安判事

スレンダー …シャロウの親戚

フランク・フォード、

ジョージ・ページ

…ウィンザーの市民

ウィリアム・ページ …ページの息子

サー・ヒュー・エヴァンス

…ウェールズ生まれの牧師

医師キーズ …フランス人の医師

ガーター館（イン）の主人

バードルフ、

ピストル、

ニム

…フォルスタッフの家来

ロビン …フォルスタッフの小姓

ピーター・シンプル …スレンダーの召使い

ジョン・ラグビー …キーズの召使い

ジョン、ロバート …フォードの召使い

フォードの妻（アリス）

ページの妻（マーガレット）

アン・ページ …ページの娘

クックリー …医師キーズの召使い

その他フォードやページの召使いたち。

≪『二人女房』登場人物¹²≫4名

四万台（よまんだい）五郎

妻 おごうと呼ぶ

女 いちやと呼ぶ

太郎冠者

≪『法螺侍』登場人物¹³≫6名

洞田助右衛門

太郎冠者

次郎冠者

焼兵衛

お松

お竹

原作から筋を削った分、『二人女房』と『法螺侍』は原作の五分の一、四分の一と登場人物数が大幅に減っている。

3.2 幕場数

原作…… 5幕 23場¹⁴

『二人女房』……幕場なし¹⁵

『法螺侍』……6場¹⁶

狂言では普通6場の幕場はない。この点で『法螺侍』は通常の狂言様式から外れている。

3.3 上演時間の推定

上演時間について確認する。筆者は実際の上演を観ていないので、DVD『まちがいの狂言¹⁷』など上演時間のわかる資料を利用して、台詞の行数から上演時間を推定した。

推定に当たって考慮した上演時間の情報は下記である。

1) 『じゃじゃ馬馴らし』の上演は十数分¹⁸。

2) 『法螺侍』と『茸（くさびら）』の公演全体で65分¹⁹。

¹³ 前出『法螺侍』より。

¹⁴ 前出『シェイクスピア大全』*The Merry Wives of Windsor*（アーデン版）より

¹⁵ 前出『二人女房』より。

¹⁶ 前出『法螺侍』より。

¹⁷ DVD『まちがいの狂言』（2002年8月上演記録）日本コロムビア、2005年。

¹⁸ 前出『フォルスタッフ変容』p.185より。

¹⁹ 『能楽タイムズ』691号（2009年10月号）の森村進による『法螺侍』の劇評より。

のオペラ「ファルスタッフ」から得るところが多かったようで、上演を見に行き、ビデオも繰り返しかけておりました」とある。

¹¹ 前出『シェイクスピア大全』所収、『ウィンザーの陽気な女房たち』（大山敏子訳）より。

¹² 前出『二人女房』より。

3)『まちがいの狂言』で正味 94 分²⁰。

上記で、台本の台詞の行数は下記のようなのである。

- ・『じゃじゃ馬馴らし』…… 180 行²¹
- ・『茸（くさびら）』…… 130 行²²
- ・『二人女房』…… 370 行²³
- ・『法螺侍』…… 430 行²⁴
- ・『まちがいの狂言』…… 900 行²⁵

ちなみに、原作『ウィンザーの陽気な女房たち』(*The Merry Wives of Windsor*) は 2,612 行である²⁶。したがって『二人女房』は原作の約七分の一、『法螺侍』は約六分の一の分量に行数を減らされている。

さて、『まちがいの狂言』が 900 行で 94 分なので、上演時間はおよそ 100 行で 10 分と見積られる。そうすると、『じゃじゃ馬馴らし』は約 18 分、『茸（くさびら）』は約 13 分、『二人女房』は約 37 分、『法螺侍』は約 43 分となる。

『茸（くさびら）』と『法螺侍』を合わせた時間は約 56 分であり、上演前の挨拶等の時間を勘案すると、全体で 65 分という劇評に反しない。また『じゃじゃ馬馴らし』も十数分の枠に収まって先の条件に合うので、上記推測は概ね妥当と思われる。

すなわち新作狂言『二人女房』と『法螺侍』の上演時間は下記のように見積られる。

- 『二人女房』（台詞は原作の 1/7）… 35～40 分
- 『法螺侍』（台詞は原作の 1/6）… 40～45 分。

いずれも狂言としては長めの作品であるが、筋の単純化もあり、通常の狂言上演時間の枠に収まっている。

4. 狂言化について

²⁰ 前出 DVD『まちがいの狂言』より、開演前と大団円のところを除いた正味時間。

²¹ 三宅藤九郎『藤九郎新作狂言集』能楽書林、1976 年より。

²² 『狂言集成』より。行数 100 行であるが、語り手を頭出しにして改行する場合のみなし改行分 30 行を加えて 130 行と数えた。

²³ 前出『二人女房』（『観世』所収）より。

²⁴ 前出『法螺侍』より。

²⁵ 同上。

²⁶ Leslie Dunton-Downer, Alan Riding, *Essential Shakespeare Handbook*, Dorling Kindersley Pub., New York, 2004, p.219.

前出「フォールスタッフ変容～シェイクスピアを狂言化する」の中で、高橋康也は『法螺侍』創作で工夫した点を幾つか解説している。ここでは『二人女房』についても確認し、その異同を考えたい。

4.1 現代劇、市民喜劇

高橋が『ウィンザーの陽気な女房たち』を原作に選んだ最大の理由は、それがシェイクスピア劇唯一の「現代劇」であり「市民喜劇」だからであった²⁷。

とはいえ『法螺侍』に登場するのは、今は昔の侍の世、室町時代とおぼしき世の侍と町人であり、現代劇とはいえない。

一方で『二人女房』は、「エライお役人」たる四万台五郎が登場する。役人と言葉から明治以降の世が連想され、また「四万台」は当時の流行語だった²⁸から、こちらは「現代劇」を意識していたと考えられる。

ただし、どちらも町人の婦人とちょっと偉い市民の男が活躍する話であり、市民喜劇という点は両者に当てはまる。

4.2 胡散臭いにせもの false stuff

高橋はフォールスタッフを胡散臭いよそ者でにせもの（false stuff）と論じている²⁹が、『法螺侍』の洞田助右衛門も都を追いだされて来た余所者で、酔っ払いの女好き、不埒な老いぼれ侍に描かれており、そういう設定になっている。

一方で『二人女房』では、四万台五郎はエライお役人であるが、特に余所者という表記はない。ただし、偉ぶってはいても甚振られれば泣いて許しを請う小物であり、見かけ倒しのにせものである。

4.3 スケールの大きいフォールスタッフ

高橋は、フォールスタッフを誰よりもスケールの大きい登場人物として、これまでの狂言の全レパートリーを見てもそんな人物はいないとした³⁰。

²⁷ 前出「フォールスタッフ変容」p.186.

²⁸ 茂山千五郎『千五郎狂言咄』講談社、1983 年、p.49 より。「そのころ、ちょうど“四万台”という言葉が流行していたのです。お役人用の公用車が白ナンバーの四万台だったので、それをもじった名前で、役人の汚職と弱気な夫の浮気を皮肉った内容でした」

²⁹ 前出「フォールスタッフ変容」p.188 より。

³⁰ 同「フォールスタッフ変容」p.189 より。

『法螺侍』の洞田助右衛門はそんなスケールの大きい人物に描かれており、物語の終わりで語る次の言葉に、その人物の大きさが窺える。

何の、何の。謝つて、何になるぞ。この世は悉皆、冗談ぢや。人間、所詮、道化に過ぎぬわい。笑ふが人生、笑はるるも人生。いかにたくさん泣いたとて、人の世の涙の量は、せいぜい、笑ひの量と同じぢや。身どもは最後まで笑ひ、かつまた最後にいちばん良く笑ふ所存ぢや。この太鼓腹に賭けて、身どもの所存は変わり申すことはないわいやい³¹。

これは高橋の作った台詞であり、原作にはこれに相当する台詞はない。洞田助右衛門は、原作を超えるスケールを持つ人物になった。

一方で『二人女房』では、四万台五郎はスケールの大きい人物ではない。むしろ許しを請うて泣き喚く小物に見える。

以上から、フォールスタッフに相当する人物の大きさにおいて、原作より小物にしたのが『二人女房』、大物にしたのが『法螺侍』と考えられる。

4.4 名乗り

『法螺侍』は、冒頭の名乗りで「これはこの辺りに住まひ致す、いや、この辺りに仮住まひ致す、洞田助右衛門と申す侍です」と、「いや、この辺りに仮住まひ致す」という繰り返しの強調を入れる工夫をした³²。

一方で『二人女房』では、名乗りは「これは四万台五郎と申す、エライお役人です」とシンプルにまとめている。

狂言の名乗りで前者のようなものはあまり聞かないので、名乗りについては『二人女房』の方がより狂言の様式に沿っていると言えよう。

4.5 他作品からの台詞の借用

『法螺侍』では、『ヘンリー四世』や『ハムレット』など、他作品から借用された粗筋や台詞が随所に見られる。下記は『ヘンリー四世』からの借用だが、

³¹ 前出『法螺侍』pp.137-138より。ルビは省略した。

³² 前出「フォールスタッフ変容」pp.189-190より。

ヴェルディのオペラ『ファルスタッフ』でも借用されているとのこと³³。

このど阿呆者め。名誉とは何ぢや。言葉の切れっぱし、空っぽの空気ぢやわい。侍が名誉のために戦に行く。その戦の場で失うた手足が名誉で元に戻るか……³⁴

他にも、例えば二場のお松とお竹が助右衛門から届いた手紙を読み合う場面で、

お松 「ロミオなる若者が」

お竹 「ジュリエットなる乙女をば恋ひ慕ふ。」

お松 おお、ジュリエット。

お竹 ロミオ。(二人、笑う)³⁵

と、『ロミオとジュリエット』からの借用がある。ほかに、三場の焼きもち焼きの焼兵衛の台詞で、

焼兵衛 おお、操弱き者よ、汝の名は女房なり³⁶。

と、『ハムレット』の台詞から借用した台詞があり、五場、太郎冠者の台詞には、

太郎冠者 …どこかで聞いた諺ぢやが、<生か死か、確かにそれが問題でござる>³⁷。

と、これも『ハムレット』からの借用がある。ほかに、「きれいはきたない³⁸」と『マクベス』の魔女の台詞を思わせるものもあり、『法螺侍』はそういった借用に溢れている。

一方で、『二人女房』は、太郎冠者の「兎角お役人と申す者は、押しばかり強うて勘のにぶいものでござる³⁹」という台詞など、内容で笑わせる台詞が多

³³ 同「フォールスタッフ変容」p.192より。

³⁴ 同上、pp.190-192より。

³⁵ 前出『法螺侍』pp.103-104より。

³⁶ 同上、p.110より。

³⁷ 同上、p.128より。

³⁸ 同上、p.125より。

³⁹ 前出『二人女房』より。

い。何かからの借用というのは、見つけられなかった。

4.6 陽気な女房たち

高橋康也は、陽気な女房たちについて、次のように述べている。

伝統的な狂言の「わわしい女」は、「女房とて陽気でしかも貞淑であることはできる」と言い切るシェイクスピア的な明るい現実感覚をあまり持ち合わせていない。『法螺侍』の女たちはシェイクスピアのおかげでこの欠落を多少埋めるかも知れません⁴⁰。

たしかに、お松とお竹の明るさは、従来の狂言にはない人物像かもしれない。『二人女房』の妻おごうはわわしい女だが、陽気な女ではない。『二人女房』では女を狂言的なわわしい女にすることで陽気さを失ってしまったが、『法螺侍』はあえて従来にない人物像を創造したといえる。

4.7 男の焼きもち

高橋が指摘するように、男の嫉妬や焼きもちもまた、従来の狂言にはないテーマである⁴¹。『法螺侍』ではお松の夫の焼兵衛が該当するが、焼兵衛が餅兵衛と名を変えて助右衛門に近づくあたり、これらの名前はまさに焼きもちをもじっていて、滑稽にテーマを伝えている。

一方『二人女房』では、嫉妬する夫のくだりは、太郎冠者が、策略でいちやの夫に扮して、怒りで四万台を打ちのめすべく登場する。寝取られの焼きもち亭主は実在せず、太郎冠者の演技にめめしい感じも受けないので、焼きもち焼きの情けない男という新人物像の開拓に関して、片山のそれは積極的ではないのかもしれない。片山は狂言に似つかわしくないものは徹底的に削ぎ落として『二人女房』を創作したようにみえる。

4.8 若者の恋愛

シェイクスピアの喜劇ではよく現われる若者の恋のテーマは、狂言では殆ど扱われずに能に委ねられて

いる。高橋は、若者の恋の筋を割愛したのは、筋立てを簡素化するためだけでなく、この狂言の伝統に従ったことも理由だと述べている⁴²。

『二人女房』もまた、若者の恋の筋は割愛されている。狂言になりにくいと意識して割愛したかどうかは不明であるが、片山は狂言らしい新作創作を目指したから、狂言に似つかわしくない筋は無意識に刎ねられたのではなかろうか。

4.9 劇場化

『法螺侍』の最後は、「踊る阿呆に、見る阿呆、同じ阿呆なら…」と阿波踊りを模した謡いと踊りのグランド・フィナーレで終わる。これは原作にもない終わり方で、伝統的狂言の「浮かれ留め」の域も大きくはみ出しているという⁴³。

一方『二人女房』の終わりは、狂言でよく見られる「追い込み留め」で、「こちへ来さしめ」「許いてくれ——」「サア——こちへ来さしめ——」「許いてくれ——」と終わる⁴⁴。

前出「フォールスタッフ変容」では特に指摘されていないが、『法螺侍』は伝統狂言と較べて劇場化の要素が見られるようになった。上記のグランド・フィナーレ・大団円もそうだが、六つの場、照明の利用など、従来にない取り組みがなされている。

一方で『二人女房』は、伝統的狂言の枠から外れない。『法螺侍』よりはるかに保守的な創作志向となっている。

5. まとめ

ここまで、前出「フォールスタッフ変容」で高橋康也が述べていることを中心に、『法螺侍』と『二人女房』の狂言化を比べて見てきた。

どちらも、男の二股手紙に女たちが怒り男を懲らしめる筋に簡素化され、登場人物も4人、6人と大幅に減り、40分前後の上演作品になった。

しかし、洗濯かごで川に投げ捨てられる場面など細かい出来事まで原作に準拠した『法螺侍』に対して、『二人女房』は大筋以外原作をばっさりと書き換

⁴⁰ 前出「フォールスタッフ変容」p.193より。

⁴¹ 同上。

⁴² 前出「フォールスタッフ変容」p.194より。

⁴³ 同上、p.195より。

⁴⁴ 前出『二人女房』より。

えている。また、伝統的狂言の様式を遵守する『二人女房』に対して、『法螺侍』は6場構成、大団円、照明の活用など、劇場的要素も取り込んだ新しい舞台創造を試みた。

さて、ここまで見てきて、高橋の視点は洞田助右衛門がフォールスタッフらしく在ることに大きなこだわりがあることに気づいた。両作品の翻案化の相違を端的に言うならば、『二人女房』は筋の狂言化に重点を置き、『法螺侍』は人物の狂言化に重点を置いていたのではないか。

冒頭で、「シェイクスピアは狂言化に堪えうるか」といったときの「シェイクスピア」は、劇の筋というよりは、劇の人物を意としていたのではなかろうか。一方で片山の狂言化では、「シェイクスピア」は人でなくて筋であったように思われる。

「シェイクスピア」が人物ならば、フォールスタッフは洞田助右衛門となって狂言化に堪えた。「シェイクスピア」が劇の筋ならば、『二人女房』は狂言化に堪えたと言えよう。

一方、シェイクスピアの原作のもとで、狂言に劇場的要素を取り込むことをシェイクスピア化と考えると、『法螺侍』はその初めての試みとなった。舞台としては反響も大きく大成功だった。しかし、これが狂言なのかという点では、どこまで劇場化が許されるか疑問が残る。

『能楽タイムズ』689号⁴⁵巻末「今月の能」の上演案内では、

——8月11日（火）——

○万作・狂言十八選

7時 東京芸術劇場

狂 法螺侍 野村万作 萬斎

……

とあり、『法螺侍』は狂言として扱われている。しかし、『能楽タイムズ』670号⁴⁶を見ると、同じく巻末「今月の能」で、

——1月30日（水）——

○まちがいの狂言

7時 神奈川県立青少年センター

「まちがいの狂言」 野村万作 萬斎

……

とあり、『まちがいの狂言』には**狂**の記号がなく、通常の狂言作品として扱われていないことがわかる。

『まちがいの狂言』は高橋康也作の狂言作品であり、シェイクスピアの『間違いの喜劇』を原作としている。11場で100分近くと上演時間は長いが、『法螺侍』と同様に工夫・創作されているように見える。

『まちがいの狂言』は狂言的な舞台であっても狂言そのものではない、という受け止め方が強いのであろうか。狂言として受け容れられる線引きはどこにあるのか、今後考える必要があろう。

以上、シェイクスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』を原作とする新作狂言『二人女房』と『法螺侍』について、両作品を比較しつつ特徴を見てきた。今後とも資料蒐集に努め、もっと様々な視点から両作品の特徴を論じたい。また、『二人女房』や『法螺侍』以外の作品についても、資料を蒐集し、今回のような考察を行っていくことが、今後の課題である。

(Received: September 30, 2014)

(Issued in internet Edition: November 1, 2014)

⁴⁵ 『能楽タイムズ』689号、平成21年8月号。

⁴⁶ 同670号、平成20年1月号。